

University football League of KANSAI



**2008
SEASON
CLIMAX!**

Team Information

阪南大学



Get the Champion!

圧倒的な力

前期リーグを8勝3分、無敗の首位で折り返した阪南大学。3節までは全て引き分けとスロースタートのように見えたが、4節以降は負けなしで着実に勝ち点を重ねた。関西選手権でも他を寄せ付けぬ強さを見せ優勝すると、勢いそのままに総理大臣杯では全国の強豪校を破り、決勝進出を果たした。

攻撃面では前線の選手が豊富な運動量で常に高い位置でボールをキープし果敢な攻撃を仕掛ける。守備面ではリーグ戦で4失点と安定感のあるディフェンスを誇り、1-0の厳しいゲームも確実にものにする。

攻守にバランスがとれた阪南大学。後期も無敗でリーグ制覇を狙う。

前期リーグを無敗の首位で折り返した阪南大。そのチームを支えるエースでキャプテンのFW西田剛選手に、今のチームの状況を語ってもらった。

—この夏のチーム作りは？

突き詰めるべき所をとことん突き詰めていった感じです。U-19韓国代表やJリーグチームとの練習試合を組んで、個々の力がある相手に対して組織でどう守るかを学びました。

—夏の成果は実戦で発揮されていますか？

天皇杯予選では正直、全くです…。攻撃面では僕と木原との連動性がない。チームとしても相手が引いてきた時の対応が上手くいってなかったり、セカンドボールを奪いきれていなかったり不安はあります。

リーグ戦で同じことをしていたらやら

れてしまうと思うし、そこはもっとコミュニケーションをとって修正していきたい。今はチームに波があるし、どんな状況でもある程度の水準で出来るようにならないと…。

—その中で夏に成長したと言える所は？

前期は相手に先制点を取られると勝てなかったけど、夏の間に逆転勝ちが出来るチームになった。そういう自力はついたと思います。

—前期リーグ無敗の阪南大。後期はより一層、他大学からのマークも厳しくなってくると思われますが？

前期リーグのことは考えずに、勝ち点0からの再スタートの状況だと割り切って後期リーグに望みたいです。練習からハードにやっていってどんな状況でも勝ちたい。その先にリーグ優勝もあるし、

インカレも見えてくると思います。

—夏に果たせなかった全国制覇にも期待がかかります

今のままでは不安なので…。キャプテンとしてはチームに喝を入れたいといけないと感じています(笑)

僕自身もチームに貢献できるように点に絡むプレーを見せていきたいと思います。

—個人タイトルとしては得点王も狙っていききたいところですね？

狙っていききたいですけど、それは心の隅の方に置いておいて…。まずはチームが勝つことが大切なので、前線で起点になったり、少しでも勝利に貢献することが一番の目標ですね。

～至上最強阪南へ～ —海外での武者修行を糧に—

前期公式戦19試合で、唯一の黒星が総理大臣杯決勝戦。あの敗戦から1ヶ月——。悔しい思いを胸に、若武者達は海外へと修行の場を広げた。

MF木原正和は大学選抜でイタリアへと旅立った。向こうではセリエC、B、Aのポーロニャと対戦。やはり体格差、レベルの高さを痛感したという。それでも「スピードを生かしたプレーは通用した」と手ごたえを掴んだようだ。一方チームは韓国に渡り、大学生やU-19韓国代表と対戦。DF野田紘史は「今までやった中で、一番上手いと感じた。それでも連動した動きや、仕掛けの部分はできた」と成果を話した。

そして8月31日。夏の総仕上げとなる大阪サッカー選手権大会(兼天皇杯大阪代表決定戦)ではイン食品を破り、まずは一つ目のタイトルを手に入れた。至上最強阪南大へ——。機は熟した。



FW西田剛

関西を代表するエースFW。背番号13。圧倒的なリーダースhipでチームを支え、阪南を王者へと導く!

取材：森井亜由美、久住真穂

全国での栄光へ

前期を2位とまずまずの成績で折り返した関大。「後期を戦うにはいい位置」とMF大屋翼主将は語る。だが油断は禁物。優勝の前には前期で敗北を喫した阪南大や、びわこ大が立ちはだかる。

「前期は波があって、コンスタントにいいパフォーマンスがでなかった」（大屋）。0-2と完敗を喫した阪南大戦では、敵の素早いプレッシャーに引き気味になり、試合の主導権を握ることができなかった。

「完敗したことがチームに大きな影響を与えた」（島岡コーチ）。悔しさを糧に、夏の合宿を経てさらにチーム一丸となった関大。部員全員で2年ぶりの関西制覇、そして全国での栄光を掴みに行く。

関西大学



今回のインタビューでは、選手から絶大な信頼を受ける島岡健太コーチと、約160名もの部員を率いるキャプテン翼こと、大屋主将に話を伺った。

—まず前期を2位で折り返した、率直な感想をお願いします。

島岡コーチ：2位というのが良かったとか、悪かったとかというのは特にはない。でも通年リーグになって、チームを立て直したり、育てたりする時間の余裕があるのはいいですね。

大屋：1位で終えたかったのは本心。でも去年が（7位と）悪かったので、後期に向けてはいい位置やと思います。

—夏合宿ではどのような部分に力を入れましたか？

島岡コーチ：ボリュームです。プレーの幅においても、チームの状態においても、

すべてにおいてボリュームアップをするということを目指した。90分のゲームを1日必ず1試合は入れて、ボールばかり追いかけてました。

大屋：ピッチの中でも外でも、選手同士の話し合いを意識的に行うようにしました。連日のゲームはきつかった。歳ですかね……（笑）

—キーマンとなるのは誰でしょうか？

島岡コーチ：誰とかじゃなくて、全員に期待してます。

大屋：FWの阪本が復帰しました。ピークの頃のプレーにはまだまだやけど、金園や佐藤悠など他のFW陣にいい刺激になればいいです。

—後期リーグのヤマ場はどこでしょうか？

島岡コーチ：分かりません。前期とはまた違った内容になるやろうし、一戦一

戦戦っていくだけ。国立でトロフィー持っている姿をイメージして戦っていく。

—最後に、関大サッカー部の目標をお願いします。

島岡コーチ：優勝！関西でも優勝！そしてインカレでも優勝！

大屋：最後に後輩たちに何かを残したい。そして『日本一であって、人として一流の集団』でありたいです。そういうチームで日本一になりたい。



島岡健太コーチ(写真中央)



大屋翼主将

島岡健太コーチ：7年前からコーチを務め、選手からの人望も厚く、熱い男。**大屋翼主将：**チームの柱であり、攻守の要。左足から繰り出される正確なFKにも定評がある。

取材：山本真由美

～ゴールへの情熱を胸に～ —FW金園英学—

前期リーグ9ゴール2アシストと、圧倒的な攻撃力で一躍関大のエースへと成長したFW金園英学。後期への意気込みを聞いた。

—まず前期を振り返ってみてどうですか？

納得していません。阪南大とびわこ大に負けて、悔しさが残りました。

—ご自身のプレーの出来は？

70%ですね。ボールがない時の動きが悪かった。去年はルーキーで自由にやらせてもらえたけど、今年は2年生になって、責任感や使命感も出てきた。「やらなきゃいけない」ってのが、逆にいいモチベーションになってます。

—後期に向けて意気込みをお願いします。

自分のプレースタイルは、情熱押し出してやるだけやと思ってます。前期はけがをしてチームに迷惑をかけてしまった。後期は負けなしで優勝したいです！

びわこ成蹊 スポーツ大学



チーム期待の星、DF内野貴志。野洲高校卒業、他大学に入学し、びわこ大の社会人チームに所属。そして、びわこ大へとやってきた異色のディフェンダーだ。ルーキーイヤーにはレギュラーを勝ち取り、新人賞を獲得。勝負の2年目、春は怪我に泣いた内野選手に、後期への意気込みを問いかけた。

—前期は、怪我に苦しみました。

ずっと出られなくて、第9節の関大戦で初めて出ました。1-1の状態が途中から交代で入って逆転勝利。流れを変えられて良かったです。でも次の関西選手権で、試合に出てなかった影響もあって全然フィットしなくて、惨敗してしまいました。個人としては不甲斐ない結果でした。

—びわこ大はどのようなチームだと感じ

ますか？

勢いのあるチーム。まだまだ実力と言うと下だと思えます。それでも運とかじゃなくて勝っている。良い守備ができれば、攻撃もできる。段々レベルが上がってきていると感じています。

—社会人チームから大学に入り直しています。

社会人チームは練習が週に2回しかなく、正直物足りなくて・・・地元で、高校のチームメイトもいるびわこ大に入りました。環境も整っていて、みんな仲が良い。今までで、一番いいチームです。

—夏に取り組んだこと

春は守備がバラバラになったら、何もできなくなったことが課題でした。守備から入るチームなので、後ろから押し上げたり、DFラインの操作を意識して練

習しました。

—後期、勝つためには

失点が多いので、できるだけどんな強豪とやっても、最小失点で抑えることです。そのための準備を夏にしてきました。後期も勝ってインカレに出場したいです。

個人的には、夏から試合を90分こなしているの、秋のリーグではいい具合にコンディション整っていると思います。

—最後に“誰にも負けない”プレーを教えてください。

ロングボールです。全国でもトップクラスの自信があります！選抜やユニバーシアードにも出場したい。最終目標は、プロです！

～注目の選手～ —DF 船津徹也・FW 平野甲斐—

びわこ大の大黒柱と言えばDF 船津徹也しかいない。チームが苦境に立たされても、最後まであきらめず戦う姿は、見るものを惹きつける。元々はサイドバックの選手だが、この春は松田保監督から「プロを目指すなら、複数のポジションができるように」とボランチを任された。高い身体能力と守備。そしてゴールへの嗅覚も持ち合わせている。後期に向けて「打倒阪南。リーグ優勝、そして日本一。」と力強い意気込みを語る。船津がびわこ大をインカレへと導く。

前期、一番の成長株となったのはFW 平野甲斐。現在、アシスト数10とランキングトップを走る。チーム内での前期MVPにも選ばれた。「アシスト王を絶対獲ります。夏でレベルアップしたエースの爆発に期待して下さい。」と宣言。後期も、サイドを駆ける平野から目が離せない。



DF 内野貴志

DFラインを統率する若きリーダー。目標とする選手は、同じDFの船津徹也、バルセロナのマルケス。

取材：久住真穂

勝つために

強いびわこ大が帰ってきた。一時は首位を走り、3位で前期を終えた。

今年の特徴はやはり攻撃力。11試合で28ゴールをあげ、抜群の攻撃力を誇る。

一つ気がかりなのは、負けた試合での内容が悪いことだ。4失点での敗北。関西選手権の一回戦敗退。しかも相手に「前期で一番いい試合だった」とまで言わしめた。何かが足りない。それは創部6年目の若さなのか。あるいは選手の経験値か。

今期、インカレ出場枠は3。少ない枠を死守するには、ブレない強さが求められる。

インカレ射程圏内

リーグ序盤は、試合を優位に進めながらも勝ちきれない試合が続いた。MF小関佑典主将の口からも「まだまだ共通意識が足りない」という言葉が何度も聞かれた。しかし、第6節で立命大に快勝すると、徐々に調子を上げる。第9節では、DF飯田洋介の終了間際の劇的ゴールで勢いに乗った。前期最終節では、3-0で桃山大に快勝し、3連勝という最高の形で前期を締めくくった。

現在、首位阪南大との勝ち点差は8。後半戦の巻き返しには、FW桑原透記らの奮起や、相手の攻撃の芽を摘む前線からのプレスが不可欠になる。2年連続のインカレ出場、そして久々のリーグ優勝へ。後期の関学イレブンの戦いから目が離せない。

関西学院大学



インカレ出場を絶対目標に掲げる関学。その中心を担うのはやはり主将の小関しかいない。最後のリーグを直前に控えた彼に、思いを聞いた。

—前期を終えられての感想は？

結果的に4位につけられてよかった。勝ちきれない試合があった中で、この成績というのは満足するものはあるが、今後に向けて多少の不安は残る。インカレに出場するためには、3位以内が絶対条件なので、まだまだ上を目指してやっていきたい。

—夏合宿などの成果は？

遠征が多かったなので、試合も多くできた。やはり課題を試すのは、公式戦をイメージできる試合の中が一番。その中で、この暑い時期に走れるようになってきたし、時間帯によって適したプレーができ

るようになってきたのが一番の成果だと思う。やはりうちはプレスが一番のウリになってくる。90分間走ることができ、ボールが効果的に回るようなチームにしていきたい。

—後期のカギになってくる部分は？

前期勝ちきれなかった部分をしっかりと勝ちきることと、最悪でも勝ち点1をとることが大切になってくると思う。まずは、初戦の大院大戦でしっかりと勝ち点3を取りたい。そして、昨年のように自分たちのサッカーをして、スタートダッシュをかけたい。

—関学の“ここを見てくれ！”という部分は？

90分間通して誰も手を抜かないというところを見てもらいたい。夏にやってきたものには自信がある。成長した面を

見てもらいたい。

—主将として、どのようにチームを引っばっていききたいか？

僕たち4年生にとっては、最後のリーグなので、4年生としてチームをしっかりと引っばること。主将としては、しっかりと試合に出て、周りに影響を与えられる人間になりたい。主将というのは、フィールド上で一人だけ雰囲気は違っていることが大切だと思う。自分の姿で周りを変えていきたい。

—最後に目標を

このチームを立ち上げたときの目標が『インカレでの雪辱を果たすこと』だった。もちろん優勝も狙っているが、まずはしっかりとインカレ出場権を勝ち取りたい。そして、一日でも長くサッカーをしたい。



MF小関佑典

関学の主将。ボランチとして、攻守の両面にわたり、チームの中心的役割を担う。

取材：石堂和輝、谷川あす香 写真：桑田淳

～主将・小関が推薦する注目選手～

◇主将から見たFW桑原透記

「以前の活躍で一番印象に残っているのは、今年の関西選手権での2得点。FW陣が点を取れずに苦しんでいた時に決めてくれたのは大きかった。また、夏合宿でも彼が一番点を決めていた。上級生と下級生の架け橋ともなっている桑原は、去年から明らかにプレーも、人格も変わってきている。後期も、インカレ出場に向け、彼に奮起してもらいたい。」

◇主将から見たMF阿部浩之

「まだ大学に入って半年の1年生ではあるが、これからの成長がますます楽しみな選手。立命大戦では、難しいボレーを決め、大院大戦でも飯田の点をアシストするなどの活躍を見せてくれた。どの得点にも絡み、攻撃の起点となっている。攻撃は彼から始まるものといっても過言ではない。ボールを持ったら何かしてくれると期待している。」

同志社大学



タレント集団の失速

「失速」。それ以外の何ものでもない前期リーグだった。一時は首位に立ちながらも、第7節から1分4敗。その原因を望月監督は「気の緩み」と言い切る。

高い位置でボールを奪ってのスピーディーな攻め。昨年度のメンバーが多く残り、完成度の高かったチームは序盤の首位戦線をかき回した。だが、最後の局面を打開できるMF楠神順平へのマークが厳しくなると、攻め手を欠く。ラインが下がり、押し込まれて失点。悪循環を断ち切れなかった。

前期序盤の良いところを取り戻すこと。同志社にとって、夏の目標が明確になった前期だった。

守備にも定評のある同志社大。最終ラインから冷静沈着に展開を読み、安定した守りで堅守を支えるDF永戸康士選手に話を伺った。

—前期リーグを振り返っていかがですか？

最初はいい形で勝っていたけれど、後半は上位チームとあたって勝てなくなってしまった。原因としてはチーム全体にも甘い気持ち生まれ、それが練習にも出てしまったことが挙げられると思います。

—上位チームを見て印象は

技術的な差はあまりないと思います。足元が巧い選手も多く、技術的には十分渡り合える力をチームメイトはもっている…ただ、練習に厳しさを持ってやっていなければ、いざ試合となっても勝てないのでは、と…。

—開幕戦に向けての意気込みはどうですか？

開幕戦はやはり大切なので、春の終わり方が悪かった分、チームひとつとなって勝ちに行きたいです。それによって勢いもつけられると思うので…。

—昨シーズン惜しくも逃してしまったインカレ出場への思いをお願いします。

僕自身、今まで全国の強豪と対戦したことがありません。今自分は3年生だけれど、来年もう1年チャンスがあるというような気持ちは持たずに目指したい。来年を見据えた上でも、全国を一度経験しているとしていないとでもだいぶ違うと思います。

—自分の持ち味や特徴について聞かせてください。

体の線が細いので、その分頭を使って

プレーしているつもりです。ボールを回しているときは常に前を意識し、攻撃に絡んでいくパスを出せるよう心がけています。

—後期リーグを見据えて抱負をお願いします。

チーム的には全国に出れる位置まで上げ、最低限は残留したいです。上を目指してやっていけば自分はもちろん、チームにもいい影響があると思うので、向上心をもって頑張ります。

～注目の選手～ —MF早坂賢太—

「スタメンで出たい、自信はある」。威勢良く話すルーキーに話を聞いた。

MF早坂賢太。中京大中京高の元10番が、同志社に刺激を与えていた。背丈もあるし、足下の巧さもある。

前期は病気や事故でなかなかコンディションが上がらなかった。だが、夏の関東遠征で猛アピール。京都FA杯では準決勝・決勝ともフル出場を果たした。

同ポジションのMF大森一樹が「あいつは良い。僕もうかうかしてられない」と危機感を露にすれば、「ポジションを奪いたい」と早坂。

望月監督、幹部選手は揃って「競争意識が良い方向に出ている」と話す。前期は中盤のメンバーを固定してしまった反省もあるようだ。

元気なルーキーが、同志社を救う起爆剤となれるかに注目だ。



DF永戸康士

背番号5。最終ラインを堅実に守り、チームメイトからの信頼も厚い。兵庫県出身。

取材：深江友樹、伊藤紗由里

躍動

4勝6敗1分、6位。この春一番のダークホースではないだろうか。初の一部昇格となった今期、予想外の結果にチームも周囲も驚いた。

第七節までは、わずか1勝。それでも「勝っても負けても一喜一憂しない」と昌子監督の教えの下に、選手たちはあきらめなかった。結果として現れたのは第8節びわこ大戦。「一年に一度あるかないか」の乱打戦を4-3と制し、京産大戦では理想的な守備、攻撃の形を見せた。最後は阪南大に完敗したものの、2部の時からのライバル大教大を破るなど、3連勝も飾った。

後期の目標は残留ではなくインカレ出場。もう昇格組とは呼ばせない。

姫路獨協大学



姫路獨協大の躍進を支える4回生、GK家木大輔主将、MF井平圭亮副将に、1部での戦いの感想を伺った。

—前期はいかがでしたか

家木：楽しかった！チャレンジャーなんです、学ぶことばかりでした。あっという間に終わりましたね。

—2部との違い

井平：やっぱり1部のチームは、何をしても落ち着いていました。

家木：選手の肩書きですね（笑）もちろんスピードや強さは違いました。無駄な動きがないから、ミスが少ない。一番はゲーム運びが上手い！

—通用したこと

井平：結果を見ると、全体的には通用したのではないかな。

家木：でも負けたときは大敗しました。

良かった部分でいうと、ブロックを作ったときの守備はハマればよかった。

—前期を通して出た課題

井平：立ち上がりと前後半終盤の時間帯の集中力。

家木：点が獲れていないところです。特に前半戦。1部のスピードになれてきたというところもあって、後半は獲れました。

—この夏、取り組んだこと

井平：前期はわざとボールと取りに行かずに引いて、カウンターで攻撃に移していこうとしていました。でも、夏からは違う。後期は攻撃！

家木：人を追い越す動きだったり、攻撃に厚みを出しています。

—監督から学んだことは

井平：一喜一憂しないこと。バリバリ監

督を尊敬しています。

家木：隙を作らないことですね。勝っても負けても、オフのときでも隙を作らない。

—姫路獨協大はどのようなチームですか

家木：伸びしろがある。1試合1試合進化し続けるチーム。止まったら死ぬ。春の結果は、逆に危機感すら感じています。

—最後にチーム、応援に来る方にメッセージを！

井平：パワーを貰っているのだから、それに応えたい。観に来てもらって、勝って一緒に喜びたいですね。

家木：選手たちには常に足元を見て、急がずに一步一步、僕らの背中を見て、一緒に歩んでほしいです。

～昌子力監督と選手たちの挑戦～

「他のチームと同じ事をして、強くなっても意味がない。」昌子力監督は常々、チーム作りについてこのように話す。監督就任7年目。チーム初の一部リーグで、監督と選手たちは新たな舞台での挑戦を試みている。

前期リーグ開幕戦、昨年試合出場経験のない4回生全員をスタメンに起用。「賭けではあったが、彼らが頑張っている姿を下の回生に見てほしかった」とチームが一丸となって戦うため、4回生の重要性を説いた。

関西選手権一回戦敗退にも「選手たちの体を休めることができた」と疲労回復に努め、リーグ中断期間の夏においても「遠征に出て疲労をためるより、しっかり練習することが大事」と独自の強化方法を提言。多くの大学が定期戦や強豪と戦うため遠征に行く中、強化期間と位置づけた約10日間の2部練習と、練習試合を数回行うのみだった。いよいよはじまる後期、彼らの進化に期待したい。



GK家木大輔主将 MF井平圭亮副将

人一倍頑張り、プレーやメンタル面でチームを引っ張る精神的支柱の二人。姫獨大の愛すべき存在。

取材：久住真穂

桃山学院大学



もがいた前期

昨年度インカレでは、関西勢唯一の16強入り。自信を胸に挑んだシーズンのはずだった。

「結果には、誰も納得していない」。厳しい表情でDF北江進吾主将が振り返った。開幕こそ白星で飾ったものの、迎えた第3節、大教大戦で0-2の黒星。昇格チーム相手に「負けへんやろー、って雰囲気はあった」とMF船津卓也が吐露する。リズムが狂った桃山大は、その後も修正できず、不完全燃焼のまま中断期間を迎えた。

前期を終え、チームに危機感が広がったという。それこそが名門にとって、一番の収穫だったのかもしれない。

今回のインタビューでは、主将のDF北江進吾と副将MF船津卓也、そして野田浩之コーチに話を聞いた。関西選抜の経験もある幹部の2選手と、松本直也監督を支える参謀の3人だ。

—前期を終えての率直な感想をお願いします。

北江：誰も納得していません。

船津：全然っすね。自分たちのサッカーが出来なかった。

—前期リーグ不調の原因は？

北江：昨年と違って、やる事が徹底されてなかった。それに、攻守がかみ合わなかった。開幕は勝ったんで、その勢いで行きたかったんですけど・・・

船津：第2節までは、悪い感じはし

なかった。でも、第3節で大教大に負けてしまってから、リズムが狂った。個人としても、出来は全然っすね。

野田コーチ：昨年とメンバーは変わっていないが、流れの中で点が取れなかったし、攻撃に繋がる守備も出来ていなかった。上位チームに勝てなかったのも原因。

—夏はどのようなトレーニングをしたか？

野田コーチ：春の反省を踏まえて、フィジカルを強化した。北江を中心とした上回生がリーダーシップをとってやってくれている。

また、単なる守備ではなく、ゲーム全体に繋がるような守備を目指した。手応えはある。だが、所詮練習

試合なので、やってみないと分からない。

—後期へ向けての意気込みをお願いします。

北江：後期リーグは、一戦一戦全力を出し切って、絶対にインカレに行く。

船津：全勝が目標。僕ら4回生が雰囲気を作って、下の学年をのびのびプレーさせてあげたい。

野田コーチ：春には出せなかった自分たちの力を出したい。北江らがまとめていってくれると思っている。

～注目の選手～ —FW齊藤達也—

「良いの持ってますよ」と野田コーチが褒めるのはルーキーFW齊藤達也。スピードとドリブルが持ち味だ。

第2節の阪南大戦でフル出場、先制弾の活躍を見せると以後は全試合ベンチ入り。9試合出場2ゴールと、ルーキーとしては合格点のスタートを切った。

「フィットしてくればチームにとって大事な戦力」と野田コーチ。自らドリブルで仕掛けられるし、裏に飛び出してスルーパスを引き出す力も持っている。エースFW渡部泰征を中心とする上回生FW陣に割って入れるか。流れの中から得点が少ないチームの、起爆剤となってみせる。



DF北江進吾(右)：桃山学大の守備の要。最終ラインからチームを引っ張る。MF船津卓也(左)：多彩なパスが持ち味の司令塔。野田コーチ：選手からの信頼も厚い参謀。

取材：深江友樹、齊藤徹也

失意の春

「不本意」立命館大学サッカー部の前期リーグは、この一言に尽きるだろう。

インカレ出場、そして2年振りの全国制覇を合言葉に戦ったが、結果は8位。関西選手権も2回戦敗退に終わった。

攻撃にも守備にもまとまりが見られず、試合をコントロールする立命館らしさがない。「もっとできるはず」という焦りが選手たちの動きを鈍らせていた。

昨年のように軸となる選手が少なく、狂った歯車を元に戻すのは難しかったのか。夏からは『統一』というテーマを掲げ、チームの再建に乗り出している。

伝統のパスサッカーで栄冠を取り戻すために、エンジの戦士たちの逆襲が今始まる――。

立命館大学



伝統の継承者たち

立命館のキーマンこと両サイドバックのDF伊庭徹矢、DF前野貴徳選手に、後期リーグへ向けた思いを語ってもらった。

―前期リーグを振り返って

伊庭：個人の技術もあって、上手い選手も沢山いるのに、その自信をプレーに出来ていなかった。総理大臣杯に出場できなくて気持ちの切り替えが難しかったし、4回生がチームを引っ張っていけない時期もあった。

前野：内容は悪くなかったけど一つ一つのプレーが雑だった。下位チームに勝ちきれなかったし、納得は行ってないです。―夏はどのようなチームづくりをしましたか？

伊庭：走り込み中心にメンタル面を鍛えました。

前野：後半は立命らしい繋ぐサッカーを目指してパス回し中心の練習です。

―その成果は金沢遠征などでも発揮されていますよね？

前野：流经大など強いチームを相手に勝てたことは自信になった。

伊庭：勝てるチームを作ってきたし、夏の間にもやってきたことは間違っていなかったと思います。

―今のチームの状態はどうですか？

伊庭：攻守の切り替えに対して一人一人の意識が高くなったので、全体で攻撃、守備ができるようになった。前期とは全く別のチームに成長して、今は負ける気がしないうです。

―両サイドバックからの攻撃にも注目ですね？

前野：個人的には前期のアシストが1と

不甲斐ない結果になってしまったので、もっとFWにいい形でパスを出せるようにしたいです。

―サイドバックの選手同士、お互いをどう思いますか？

伊庭：前野はパス一本で攻撃を組み立ててくれるので頼りになります。

前野：伊庭くんはサイドバックとして高いスキルを持っているし、プレーも人柄も尊敬できる人です。

―後期リーグへの意気込み

前野：全勝ということがチームにも僕にも必要。それによってインカレも見えてくると思います。

伊庭：今の順位が8位で、厳しい戦いが続くけど、まずはインカレ出場圏内まで順位を上げて行って、全勝でリーグ優勝を狙ってみたいです。



DF伊庭徹矢(左)：栄光と挫折を知る精神的軸。

DF前野貴徳(右)：2回生ながら不動のサイドバック。精度の高いパスから攻撃を組み立てる。

～熱きエンジのイレブン、勝負の秋～

今年の立命館は去年のように抜き出た選手がおらず、全体的に小粒な印象だ。GK鈴木彩貴、主将のDF畑尚行を中心とした守備は大崩れしない。中盤はゲームメーカーMF福本尚純や期待の2回生MF内藤洋平などテクニシャンが揃い、つなぐサッカーの要となる。前線はエースのFW宮尾勇輝が軸となるが、前期はなかなかパートナーが固定できなかった。コンビネーションの構築が、得点力アップのカギを握りそうだ。

「声掛けやサポートができる選手を使いたい」と畑が話すように、後期はメンバーが大幅に変わる可能性もある。FW伊藤了のようにルーキーが出場機会を得ることも増えるだろう。その中で注目の選手として、MF是井優輔とMF内田昴輔の名前が挙げられる。共に前期は怪我で出場機会がなかったが、現在は好調を維持。ドリブラーの是井とパサーの内田というようにタイプは違うが、共にチーム屈指の技巧派である。心強い戦力が帰ってきた。

取材：渡辺修平、森井亜由美、阪西直登、段中翔子

大阪学院大学



王者の躓き

昨秋の王者が苦しんだ、2008年度前期だった。取材を通して数試合観たが、悪い内容の試合は見当たらなかった。しかし、勝ち点に恵まれず中位から下位を彷徨っている。

藤原監督や、数人の選手に原因を尋ねても、明確な答えはなかった。つまり最悪の状態で低迷したわけではない。ただ、試合の流れの中で、「引き分けの試合を落とし」「勝ち試合を引き分けにしてしまった」ゲームのしたたかさは足りなかったと言えるだろう。

前期を見ても、決して他の大学に劣る戦力ではなく、組織的にも自分たちの流儀を貫いていた。あえて、我慢強く、今のやり方を進化・深化させる方向性で十分に今後戦える感触は残した。

大院大で攻めの要を担うFW小野真国とチームの大黒柱・主将DF馬場悠に、これまでと後期に向けての考えを語ってもらった。

—前期を終えての感想は？

小野：新1年生として入ってきて、昨秋に先輩が残した成績を守れなかったのは口惜しい。ただし、通用しないと思ったことは少なかったし、実際得点も重ねる事が出来た。チームとしては、まだまだ上を目指さなければいけないが、個人として少し自信を得る事も出来た。

馬場：サッカーのセオリーでもある、些細な部分に徹し切れなかった前期でした。リスタートの守り、危険な時間帯の試合運び、集中力の持続などが不足していましたね。それで、多くの勝ち点を失いました。

—得点を量産出来た理由は？

小野：相手が僕の事を何も知らなかった事に救われました。後期には研究されるかも知れませんが1試合1得点をノルマとしてFWの責務は果たしたい。その事でチームの順位も上がるはず。あくまで、インカレ出場権は諦めていませんから。

—後期に向けて、着手した事は？

馬場：まずは主将としてチーム作り、雰囲気を作る事に重点を置いています。いくら難しい事をして、ムードが悪ければ意味が無い。戦術や細かい事はそこからになります。

小野：この夏は、とにかく2部練で走りまわりました。ここで培った体力が、本番で活きますと思います。僕の課題である、前線からのチェイシングとボールのタメのレベルも上げないと、守備に負担が掛

かりますから。

—後期の戦い方は？

馬場：現在の勝ち点を考えると、リスクを背負ってでも、勝ち点3を取らないといけない試合が出て来る。そこで、リスクとバランスを上手くコントロール出来るかは課題。攻撃に関しては、中盤4枚をフラットにした4-4-2で、サイドアタックを繰り返しトレーニングしているので、その成果を出したい。

馬場・小野：この夏でレギュラー争いが熾烈になって来ている。チーム内競争でレベルアップが図られ、新陳代謝が活発になればもっと強くなれるはずです。

馬場：前期で露呈した課題は、技術的な低さなどではないので、修正は出来るはず。後期は、90分間貪欲に勝ち点を狙う。

～プロも注目の馬場、快足FW小野～

主将の馬場は、この夏のJクラブの練習参加をし高い総合力を買われた。小野は前期最もブレイクした新入生。ここでは互いを紹介し合ってもらった。

◇馬場から見た小野

「とにかく速い。相手のDFは絶対に嫌なFWである。そして、テクニックも備わっているので、前さえ向ければ決定的な仕事をしてくれる。これから長所を伸ばし、上の世界で活躍する選手になって欲しい。」

◇小野から見た馬場

「今まで色々な選手と戦ったが、能力は間違いなくトップ。キックの質やボールキープ、フィジカルの強さなど、トータルでの能力が圧倒的に優れている。」

カリスマ性と実力を兼ね備える馬場と、若き俊英・小野の存在は、巻き返しを狙う大院大には欠かせない。



DF馬場悠(右)：プロも注目する逸材。攻守における貢献度は大きい。FW小野真国(左)：大院大に現れた超新星。得意のスピードと帝京魂でゴールを量産する。

取材：ハヤシヒロヒサ

最後の最後まで

昨年までのチームの柱、馬場賢治(現ヴィッセル神戸)が抜け、今年はその穴をどう埋めるかが問われる年となった。

しかし前期の結果は10位。近畿大らしいパスをつなぐサッカーでカバーしようとしたが振るわなかった。田中幸雄監督、DF山口惇也主将は「予想以上に悪い結果だった」と口を揃える。「技術的には他チームよりも上」と大会前は上位を狙える自信があった。だがロスタイムに失点する試合が目立ち、集中力が最後まで持続しなかった。田中監督は「点を取った後にネガティブになり、守りに入ってしまう。最後まで戦う意欲が持続できていなかった」と反省した。後期はこの経験を活かし最後の最後まで諦めずに戦い、2年振りのインカレ出場を目指す。

近畿大学



身長168cmと小柄な体ながらチームの大黒柱に成長したMF枝本雄一郎。「怪我をされたら1番困る選手」と田中監督からの期待も大きい。今回はそんな小さな巨人・枝本に注目し話を聞いた。

—まずは前期のご自身の活躍を振り返ってみてどうでしたか？

馬場さんの穴は自分が埋めるんだという気持ちで必死にプレーしていましたが、前期の中盤あたりから疲れが出て失速してしまったので、満足はしていません。—そんな中でもチームトップの5ゴール3アシストを決めることが出来た要因は何だったのでしょうか？

周りに助けってもらったおかげです。あとは、やはり練習をしっかりと怠らせずにやれたことですね。

初めのうちは正直「なんで練習しない

といけないのか」って思っていたんですけど、練習は技術だけでなくメンタル面でも後々効いてくるものだと知り大切に行うようになりました。練習が充実していれば自信が付き、気持ちに余裕が出て良い結果、良いプレーに繋がるんです。

—それを特に感じたのはいつですか？

練習が上手いかなかった週の試合が絶不調だった時ですね。調子が悪い時ほど素の自分が出てしまい、そこでいかに踏ん張れるかが大事なのですが、どうすることも出来ませんでした。

—夏の間はその課題を克服することは出来ましたか？

はい。去年よりたくさん走りこみを行いましたし、体のキレはとて素晴らしいです。あとは日々の練習でこの調子を継続させるだけですね。

—先程、OBの馬場選手の名前が挙がりましたが、ご自身と比べられることに関してはどう感じていますか？

馬場さん以上の選手になりたいとは思っていますが、僕は馬場さんとは違って体が小さく当たり負けしてしまうので、スピードで翻弄して相手をかかわっていく自分のスタイルを貫こうと考えています。アルゼンチン代表のリオネル・メッシのような誰にも止められないスピードがある選手が目標であり、憧れでもあります。—では最後に、目標を聞かせて下さい。

インカレ出場と全ての試合で最高のパフォーマンスを発揮することです。個人的には得点王を取ることが出来ればいいんですけど、チームが勝って喜びをみんなで分かち合える方が嬉しいので、とにかく勝ちたいですね。



MF 枝本雄一郎

背番号7。近畿大の攻撃の要。ドリブルの速さ、得点力は一級品。好きな言葉は「練習は不可能を可能にする」

取材：藤本康寛

～帰ってきたムードメーカーMF山梨洋希～

気持ちを前面に出し熱いプレーで仲間を牽引する男、ボランチ山梨洋希が後期からチームに復帰する。

前期の第2節の試合で退場を宣告された後、山梨は腹いせ行為を行ったとして連盟から前期の残り試合全てに出場停止を言い渡されてしまった。山梨は反省し頭を丸め、自らボールボーイ役を買って出るなど、チームを盛り上げようと努力した。しかし、チームは前期を終えて10位と厳しい結果に終わってしまった。山梨は自分の責任だと重く受け止め、後期に賭ける思いが人一倍強い。主将の山口も「前期は気持ちが弱く終盤に集中力を切らして負けることが多かった。山梨のような気持ちを前面に出す選手が帰ってくれば良くなると思う」と期待は大きい。夏の合宿で例年以上に走り込みを行い気持ちを鍛え上げた近畿大は、山梨の復帰とともに一回りも二回りも大きくなった。後期は全戦全勝という強い気持ちでインカレ出場を目指す。

京都産業大学



誤算と光明

勝ち点9で11位。昨年からのレギュラーがほとんど変わらない今年は躍進が期待されていたが、現実には京産大にとって非常に厳しいものとなった。

開幕直後はまずまずの出足を見せたものの、第4節関西大戦から泥沼にはまり、桃山大戦ではまさかの8失点。2部から昇格したばかりの大教大、姫獨大にも連敗。選手から「関西大戦からやり直したい」という声も出るほど、急激な崩壊だった。

チームで話し合いを重ね、懸命に立て直そうとした結果、前期の終盤2試合でようやく上向きの兆しが見えてきた。このまま波に乗ってリスタートを切り、残留争いを勝ち抜くことができるか。

J2サガン鳥栖への入団が内定した、DF渡邊将基選手にお話を伺いました。—まずは、入団の経緯について教えてください。

まず鳥栖に練習参加して、そこで良い評価を貰いました。他クラブにも練習参加する予定でしたが、鳥栖の雰囲気がとても良くてそのまま決めました。

—練習参加した手応えは？

プロのスピードに慣れるまで2日かかりましたね。フィジカルは通用したけど、判断スピードやプレーの精度はまだまだ改善が必要だと実感しました。

—サガン鳥栖の印象は？

スタジアムが凄いいいですね。サッカー専用で臨場感があって、サポーターとチームが一体化してるというか。

—鳥栖の岸野監督については？

情熱系ですね。サッカーに対して凄く熱い。監督のために勝ちたいと思える監督でした。プレーの面では、最後までボールを追う重要性を厳しく言われました。

—プロとしてプレーしていく上での抱負と目標を。

ずっとプロでやる姿を思い描いてたから自信はありますよ。まずは来年のチャンピオンに100%の状態に挑んで、開幕スタメンを目指します。大卒なので即戦力として期待されてると思うんで、自分の持ち味のフィジカルの強さを生かして1年目から試合に出て、その上でチームのJ1昇格に貢献したいですね。もし今年鳥栖がJ1に昇格したら、めっちゃラッキー！って感じです(笑)いきなりJ1でプレーするチャンスが巡ってくるんですから。その場合でも目標は同じです。

まず試合に出て、チームを一つでも上の順位にあげるために貢献する。

—大学での4年間で何を掴みましたか？

真摯にサッカーに取り組む姿勢ですね。常にサッカーのことを中心に考えるようになりました。あとは・・・よく走りました(笑)

—後期リーグへの意気込みを一言。

前期は怪我で出遅れてチームに貢献できなかったから、後期はチームの流れを良くするプレーを心掛けて貢献していきたいです。

—最後に、10年後の自分はどのようになると思いますか？

海外でプレーしてるんじゃないですかね(笑)まだまだサッカーを続けてると思いますよ。体がボロボロになるまで続けるつもりです。

～原点回帰～

今年の京産大は「選手の技術面のレベルアップを感じた。もう一段階上を狙う」(古井裕之監督)と、前からボールを奪い、パスを繋いで攻める形を志向してきた。しかし、ディシプリンを徹底できず、結局混乱を招いて大量失点を繰り返した。崖っぷちに立たされた今、理想にこだわる余裕は無い。昨年までの、自陣深くまでリトリートした状態で守り、そこから攻撃に転じて遠く離れた敵のゴールまで攻め込む形に戻し、なりふり構わず残留を目指す。この戦術の実現には、膨大な運動量が必要となる。そのため、練習では徹底した走り込みを行ってきた。その量はなんと合計250kmにも及んだという。苦しい練習を乗り越えることで精神力も鍛えられた。もう後は無い。絶対に残留するという強い気持ちで一戦一戦を戦っていく。原点に戻り迷いを断ち切った京産大の反撃がここから始まる。



DF 渡邊将基

背番号2。日本人離れした強靱なフィジカルを生かした守備が持ち味。セットプレーからの得点も大きな魅力。

取材：谷口達也

1部の壁

昇格組として、挑戦者の心意気で臨んだ前期。しかし、1部常連校の壁は厚く勝ち点を積み上げられなかった。

結果的には最下位に甘んじてしまい、後期は厳しいスタートラインとなる。幸い残留争いは大混戦のため、一気にジャンプアップ出来る位置には付けているが。怪我人や、教育実習等でベストメンバーを組めなかった事も痛かった。手薄な選手層は、勝ち点以外の課題として残った。ただ、「戦える手ごたえはある。」と監督・選手は口を揃え、1部のレベルを体感出来た事は大きい。実際、上位との試合でも、対等に渡り合っていた。

苦悩と自信を身につけた前半戦だったと言える。

大阪教育大学



The Great Escape

今回のインタビューは入口監督だけでなく、主将の仲宗根、エースストライカーの森原と、3人に話を聞いた。大教大は、監督と選手の垣根が低く、目指す方向性も共有出来ているからこそである。

—前期を終えての率直な感想は？

入口監督：何よりも準備不足。全ての意味で、準備を整えてリーグ戦に入る事が出来なかった。私の思い描くベストメンバーを組めた試合は1つもなかった。そこで起用したサブの選手もフィジカルなどに問題があり、機能しなかった。

仲宗根：プレーしている自分たちの感触としては、絶対勝てない相手はいなかった。でも、結果として引き分けや負けが続き、勝ち点を奪えなかった。惜しい試合だったと振り返る事が多いのだが、それはつまり何か足りなかったから。惜

しい惜しいの積み重ねで過ごしてしまった感はある。

—その反省を生かして、夏に取り組んだ事は？

入口監督：まずは、90分間戦えないと話しにならない。そのためフィジカルを重点的に鍛えた。相当に走った夏だった。フィジカルの鍛錬には、怪我予防もあるので、選手層を考えた時には不可欠。同時にボールを使ったトレーニングでは、1対1の勝負を徹底的に練習した。守りの1対1もそうだし、攻撃面での1対1でも競り勝てるように。前期ではこの1対1で負けたために、試合が不利になった事も多かった。フィジカルを鍛え、個の強さを身に付け、そこから戦術に入っていくというプランを立てている。

仲宗根：最上級生も監督と同じ考えで、

自分たちから体をいじめ抜く厳しい練習メニューを組んだ。確実にフィジカル面が向上しているという手応えはある。

—前期は得点力不足に泣きましたが？

森原：自分たちの攻撃スタイルは4-2-3-1。そのワントップを務める僕の責任も大きいですが、もう少し攻めのバランスやコンビネーションを向上させる必要はある。ダブルボランチには守備に重きを置いてもらい、3ハーフにサイドバックを絡めていかにサイドから崩せるかがポイント。

—上位進出の鍵は？

入口監督：まず数値的な目標としては、1試合の平均失点を1未満に抑えたい。そうすれば必ず良い試合になるから。勝ち点3が必要になる戦いなので、泥臭くても勝てる試合をしたい。



入口監督：女子サッカー一部の監督も務める熱血漢。

MF 仲宗根和：チームの精神的支柱。中盤のキーマン。

FW 森原慎之佑：生粋の点取り屋。攻撃は彼が締めくくる。

取材：ハヤシヒロヒサ

～支柱の仲宗根、決定力の森原～

前期の取材で、大教大における仲宗根主将の存在の大きさと、前線で奮闘するFW森原が目立っていたため、2人に話を聞いた。

森原から見た仲宗根

「何よりも頼れるキャプテンであり、メンタル的にチームを統率してくれる。技術面でも、ドリブルやクロスなどのレベルが高い。後期、仲宗根のアシストで僕が点を取れるようなパターンが生まれれば理想的。」

仲宗根から見た森原

「スピードスターであり、ゴール前では天才的な閃きもある。欲を言えば声で味方を引っ張って欲しいが、まずはゴールという結果をあげてくれれば良い。森原にはワントップという重荷を与えているので、理想的には、パートナーとなるFWを据えて、得点力UPにつなげたい。」

このコンビが成熟されれば攻撃力は間違いなくUPする。

2008年度 第86回 関西学生サッカーリーグ (前期) 星取表

勝点 勝 - 3 分 - 1 負 - 0

<<1部リーグ>>

前期終了

順位	チーム名	阪南大		関西大		びわこ大		関学大		同大		姫獨大		桃山大		立命大		大院大		近畿大		京産大		大教大		勝	敗	分	得点	失点	得失差	勝点
		得点	失点	得点	失点	得点	失点	得点	失点	得点	失点	得点	失点	得点	失点	得点	失点	得点	失点	得点	失点	得点	失点	得点	失点							
1	阪南大			○		○		△		○		○		△		○		○		○		△		○		8	0	3	18	4	14	27
2	関西大	●				●		○		○		○		○		△		○		○		○		○		8	2	1	22	12	10	25
3	びわこ大	●						○		○		○		○		○		○		○		○		○		8	3	0	28	18	10	24
4	関学大	△		●		●				○		△		○		○		○		○		○		△		6	2	4	12	8	4	10
5	同大	●		●		●		●				○		○		○		●		○		○		○		5	5	1	11	14	-3	16
6	姫獨大	●		○		○		△		●				○		○		○		○		○		○		4	6	1	12	22	-10	13
7	桃山大	△		●		●		●		△		○		○		○		○		△		○		○		3	5	3	16	13	3	12
8	立命大	●		△		●		●		○		○		○		○		○		○		○		△		3	5	3	11	14	-3	12
9	大院大	●		●		●		○		○		○		△		△		○		○		○		○		3	6	2	18	16	2	11
10	近畿大	●		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		3	7	1	15	18	-3	10
11	京産大	△		●		○		△		●		●		○		○		○		○		○		○		2	6	3	14	26	-12	9
12	大教大	●		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		2	7	2	8	20	-12	8

○)内は前半の得点

2008年度 第86回 関西学生サッカーリーグ(前期)

<<1部リーグ>>

前期終了時点

得点ランキング						アシストランキング					
順位	背番号	選手名	大学名	学年	ゴール数	順位	背番号	選手名	大学名	学年	アシスト数
1	19	金園 英学	関西大	2年	9	1	13	平野 甲斐	びわこ大	3年	10
2	9	瀬古 朋広	びわこ大	3年	8	2	7	小寺 優輝	阪南大	4年	6
	60	小野 真国	大院大	1年	8		25	篠部 拓真	びわこ大	3年	5
4	25	篠部 拓真	びわこ大	3年	7	4	18	佐藤 悠希	関西大	3年	4
5	10	沈 修輔	姫獨大	3年	5	6	21	大屋 翼	関西大	4年	4
	7	枝本 雄一郎	近畿大	2年	5		20	林佳祐	同大	2年	3
7	10	辻 和帆	桃山大	4年	4	10	佐藤 直裕	大院大	4年	3	
	7	宮尾 勇輝	立命大	4年	4	7	加藤 健太	大院大	3年	3	
	9	森原 慎之佑	大教大	3年	4	7	枝本 雄一郎	近畿大	2年	3	
10	3	野田 紘史	阪南大	4年	3	6	市川 恭平	京産大	2年	3	
	11	木原 正和	阪南大	3年	3	10	金本 竜市	京産大	3年	3	
	13	西田 剛	阪南大	4年	3	12	4	吉川 健太	阪南大	4年	2
	24	藤澤 典隆	関西大	2年	3		13	西田 剛	阪南大	4年	2
	13	平野 甲斐	びわこ大	3年	3		19	金園 英学	関西大	2年	2
	5	青戸 謙典	関学大	4年	3		24	藤澤 典隆	関西大	2年	2
	8	船津 卓也	桃山大	4年	3		19	岡野 雅俊	びわこ大	2年	2
16	小笠原 侑生	京産大	2年	3						ほか	

■今後の予定～

入れ替え戦(9位・10位チーム) 今年度より一発勝負となります!

12月14日 長居第二

12月20日よりインカレが開幕! 関西からは上位3チームが出場します!(全試合関東開催)

1回戦:12月20日 2回戦:12月23日 準決勝:1月7日 決勝1月11日



Photo: Yasuhiro Fujimoto

■企画編集

フリーライター

UNN関西学生報道連盟

関大スポーツ編集局

関学スポーツ

同志社スポーツアトム

立命スポーツ編集局

フリーライター

近大スポーツ編集部

京産大アスレチック

久住真穂(the chief editor)

齊藤徹也・深江友樹・森井亜由美

阪西直登・段中翔子

山本真由美

桑田淳・石堂和輝・谷川あす香

伊藤紗由里

渡辺修平

ハヤシヒロヒサ

藤本康寛

谷口達也

この冊子は有志によって制作されました。

■発行

関西学生サッカー連盟

■「2008 SEASON CLIMAX」のカラー版は学連HPにて公開中！下記URLへアクセス。

<http://www.jufa-kansai.jp/>

■試合情報、結果速報は

学連HP・携帯サイトでチェック！

